

## 詩同人誌評

### 第11回

くさびは何かを  
くい止め、繋ぐ

中塚鞠子

詩誌の中にも、詩だけでなくエッセイ、書評、など載せている詩誌が結構ある。詩だけに注目して書いてきたが、エッセイが気に入って時々入れてきた。

実際には、書評や詩論、エッセイ、は取り上げられる機会が少ないし、賞の対象になることも少ない。が大変面白いものが書き続けられている。今回はエッセイに注目しながら、同人誌の特徴を紹介してみようと思う。

「CROSS ROAD」は北川朱美の個人誌である。北川朱美「伝説のプレイヤー」(23) 蛙のように頬をふくらませじ」(「CROSS ROAD」23) 今回は、トランペット奏者デジー・ガレスピーである。(23)とあるから、個人誌創刊号から、書き続けているのだ。

ガレスピーのトランペットは、ラッパの

部分が曲がって宙をむいている。ステージに置いて席を外したスキに客が舞台上がって転び、トランペットに尻餅をついたのだ。ガレスピーはだが、へし曲がったそのトランペットが大いに気に入った。以前より柔らかな音が出るようになったと言い、蛙のように頬をふくらませて生涯それを吹き続けたのだった。

と、茶目つきのガレスピーの性格がよく表れているエピソードを紹介している。プラジール映画「黒いオルフェ」の主題歌「カーニバルの夜」はよく知られている。ガレスピーの切ないボサノヴァが世界中に広まったという私はジャズに詳しくないが、読んでみると惹きつけられる。終わると素敵なエッセイ集になるのではと思う。それに続き

北川朱美「路地漂流」(23) 戦わなかったことで傷つき」(「CROSS ROAD」23) の高井有一論も紹介しておきたい。

「母が身を投げた河は町を貫いて流れる。進むにつれて徐々に川幅を増し、——(略)——遺骸は、上を覆うものもなく、俯伏せに投げ出すように置かれていた……」

これは高井有一が芥川賞を受賞した小説「北の河」の出だしである。疎開先の角館で、

父親と祖父を亡くし、母親が生活などの不安のため精神を病んで河に身を投げた。この切ない小説は、高井の小説家の出発点になった。早稲田第二文学部を卒業後、共同通信社の記者となり、小説家になった高井が書き続けたのは戦争の悲惨さであった。戦争を生き延びて「昭和」という時代を生きた人たちの心境を生涯追及し続けたのである。北川文章はそれをよく伝えている。これも(23)であり、非常にユニークな作家論が続いている。

「ア・テンポ」はこの号からA5判に変わり、エッセイ・書評も加えて充実してきた。

牧田榮子「こたきこなみ詩集『ひとがた彷徨』より―混沌の場を描き希望を語る」(「ア・テンポ」65号)

——この度は果てるともない世界の不穏さにじっとしておられなく、人の持つ叡智を最大限活用すべく尽力してほしいとの切なる願いが語り口であり、辛さの裏にある慈愛や心情をより深く詩に込めているように感じる。勃発する大小の異変は日常に否応なく強引に割り込む。驚き呆れるだけでは前に進まない。(略)こたきこなみがひとり市民であると同時に世界の動きにも敏感に目を向けている詩人であることが読みとれる。レリーフは詩に委ねる一行のくさ

びだ。くさびは何かをくい止め、何かを繋ぐ。

牧田榮子は最近評論を多く手掛けており自分の考えをしっかりとだしていつている。

この『ひとがた彷徨』も深く読み取り、太平洋戦争を知っている世代のこたきの戦いへの気持ちをよくくみ取って、この結構難解な詩形を理解して書ききっている。

「軸」は大阪詩人会議の、歴史を持つ会員誌である。今さら言うまでもないが、詩以外にも連載物の「建築行脚は詩の旅」「連続エッセー」「おどろき」―誌上哲学カフェ―では小説の評論もある。驚くのは

原圭治「私が出会った忘れられない詩人たち」(「軸」151号)である。

九十歳になるという原の記憶力と筆力には驚かされる。今連続28回。今回は「詩人会議と共に歩んだ浅尾忠男さん(Ⅴ)」である。

私は知らない人であるが、読めば、その人の性格、生活や作品、著書などが解る。来歴、人間関係なども。

こうした詩法上の転換は、いくつかの点で前進といえるだろう。第一に政治観念を直接露出せず、自然や人間の形象の背後にひそめたこと、第二に詩の現実的よりどこ

ろを幼少期の路地りではなく、現在の日常に求めたこと、第三に先人詩人の影響が詩語の外的リズムから消え、浅尾氏らしいオリジナリティを獲得した。(略)：

これは浅尾の詩集『花盗人』の巻頭に置かれた「菜種梅雨」を例に挙げて抒情の問題を論じた一部であるが、浅尾の詩法の転換を説明したものである。

この「花盗人」に関しては、今は亡き大塚昭夫、福中都生子、水口洋二などが否定、肯定の見解を述べていて、当時の活発な意見交換の様子が解る例である。浅野が小野十三郎の「夜の詩会」(大阪文学学校の前身のような)のメンバーであったことなど福中都生子が話しているのも面白い。

「忘れられない詩人たち」はただの思い出話ではなく当時の詩人たちの状況がよく書き込まれている。どこまで続くか、頑張つてほしいと思う。

斎藤明典が藤岡陽子の「リラの花咲くけものみち」(「軸」151号)の書評も面白い。あえて中身は紹介しないが、詩誌に小説の書評が載るのは珍しい。読んでみたくなる。

添田馨「現代詞人『中島みゆき』という在りかた」(「Nemesis」9号)は小野十三郎賞受賞式二部での講演であるが、歌手としても作詞・

作曲家としても人気の高い中島みゆきを詞人と書きながら、素晴らしい詩人として分析してみせてくれている。

……歌の作りかたにおいて、中島さんはかなり「高い思想性」というものを踏まえながら、言葉がふかいところから出てきているという(深い内面性)があること、さらににもかかわらずその歌は「広い大衆性」を持つている。つまり誰にでも受け入れられるような言葉づかいやメロデーもそうですけど私たちのほうを常に向きながら、同時に「鋭い社会性」もそこにはこめられている、つまり批評的なものの見方や意見なども歌詞のなかに入れることを決して忘れていない、そうしたもののすべてが共鳴しあって、時代的な普遍性のほうに歌ぜんたいが開かれて広がっていく、そんなイメージを描くことができるのではないかと思います。

中島みゆきの魅力についていろいろな人が書いている。藤井貞和「中島みゆきミラクル・アイランド」、天沢退二郎「中島みゆきを求めて」、吉本隆明「際限のない詩魂」―わが出会いの詩人たち、落合真司「中島みゆき・無限軌道の旅」など。声に姿に、雰囲気には勿論歌詞に曲にイメージに、多くの人たち(詩人たちも)が魅了されている。添田は「空と君

のあいだ」の歌に「オウム真理教」を感じ、「俱に」の歌に、新型コロナのサイトカインストームまで感じ取っている。他の場所で、更に中島みゆきの追及を続けている。

「Nemesis」は発表の場ではなく、闘いの場なんだと、心の中で常にそう思ってきたと発行人の添田馨さんは書いています。詩で戦っている人がここにも一人いた。

「飛脚」は石毛拓郎の不定期刊行の個人誌である。石毛拓郎も文学で戦っている一人だ。

清水博司「長谷川四郎ノート(12)」(「飛脚」45号)「ベルリン後、『模範兵隊小説集』を読む」

清水博司の長谷川四郎ノートは今回で12回を数える。作品を読みながら当時の文化芸術の状況を伝えている。

—吾道竟何之(吾が道はついに何くに行かんとする) 杜甫

∴「現代芸術」を発行している「記録芸術の会」(五七年発行)は六一年に解散することになる。雑誌は一一・一二月合併号で終刊となった。(略)最終号の編集後記で編集者として(略)安部公房は

記録芸術の会は、一応の課題を果しはし

た。だがその課題をさらに創造的なものに深めるのは、今後に課された仕事だろう。(略)長谷川龍生は李白の「魯儒を嘲る」を引用して、

総合芸術とは何か、それは資本主義を生きぬいていく芸術である。資本主義を生きぬいていけないものに、どうしてきびしい社会主義が生きぬけるか、社会主義を生きぬいていけないものに、どうしてさらに峻厳な共産主義が生きぬけるか、総合芸術とは移動と転換である。

ちよつとこの観念論どちらにも私は付いて行けないのだが、この会の発足にかかわった長谷川四郎は、以後さらに記録的文学作品を残している。

「模範兵隊小説集」のあとがきに、「∴持ち時間が少なくなつた感じで、(略)ほかに書き残したことを書くのにまずこれを出す必要があった∴」と書いている。その小説は四編。

「分遣隊」(「分遣隊」は、平野の中の土饅頭だった)四方八方から敵に囲まれている土饅頭の中の偵察隊の兵士たちの生活。名前が無く兵士は番号になる。一人の兵士が消えた事件の結末が恐ろしい。

「駐屯軍演芸大会」は小学校を占拠して居座り、日々演芸大会のばか騒ぎに明け暮れている軍隊。面会人が訪れ外の町に出た一人の兵

士は、生活を感じる。が、逃亡を薦められても、彼は軍隊に帰っていく。「彼も餓い慣らされた犬なのだ」と作者は書く。演芸大会の大騒ぎのさ中、部隊は敵の空爆によって全滅し、町は解放される。

「加古一等兵の面影」では、「内務班には、殴る者と殴られる者と、この両者がいるだけで、他には誰もいなかった」と主人公は言う。軍隊生活の第一歩で目にしたものが「暴力」(リンチ)という場面であったという事実は衝撃的であった。彼は監視用のぞき穴から外を見続けているうち塀の外に色彩のある世界をみつけてしまった。彼は塀を乗り越え、単に「逃亡兵」という数字になつたのである。

「炊事兵」ではソヴェエトの捕虜収容所らしき処にいる兵士。ソヴェエトの中尉に軍隊にはなかつた友人を初めて意識できたという。長谷川は、これを書き終わってやつと除隊

になつたという。彼の部隊の全滅と(生きのこ)り(生きのびた)人間の責務として書いたのだ。この時代に生きた青年たちのことを、今の若い人たちに知ってもらいたいと思う。

「潮流詩派」は大勢の会員を抱えた総合誌として、詩やエッセイ、詩集書評、詩誌評などいつも見ごたえがある。

渡辺石夫「石原吉郎を読む4」「石原吉郎の語学志向について(四)」「潮流詩派」277号)

石原吉郎について書かれたものはたくさんあるが、少し視点を変えて書かれているのが面白い。しかし、しっかり石原吉郎論となっている。語学との関わりは、石原自身(宿命)ととらえているという。

（私が外国語というものに興味を持ち、ついにこれをSpezialitätとして選んだという《宿命》の中には、現在なお克服しきれずに悩んでいる自分自身の性格的なマイナスがはっきり反映しているように思う。いわば自分の浅はかな虚栄心が、ついに職業的なものへと結びついたのだと考えることができる(『日常への強制』構造社)）

東京外国語学校(現東京外国語大学)でドイツ語を専攻しながらもフランス語に関心を示し、エスペラント語のサークルで活動したりしている。このエスペラント語は、ラーゲリで出会った、鹿野武一との内緒の会話に使われたことは知られている。

石原は招集されて陸軍露語教育隊でロシア語を学習させられ、関東軍情報部に配属されソ連の情報分析やロシア語放送、翻訳などの仕事をさせられていたため、ソ連軍の捕虜となった時、スパイの嫌疑をかけられ重労働二十五年の宣告を受け、極寒のシベリアで重労働に使役された。抑留後解放されて帰還後も、

結局はロシア語で生活することになる。

定職を得ることに苦慮するなかで、放送局でのアルバイトに就いた時期がある。英文和訳の仕事だが、この時英語力を取りもどすため、夜学に通った、と日記に記しており、これは必要に迫られての語学学習であつたろう。しかし石原の語学能力の向上につれて、同じ仕事をしていた他の数人が仕事を失うという事実気づき、石原はこのアルバイトを辞めることになる。他人を押しつけなければ生きてゆけないラーゲリでの生活から、また同じ弱肉強食の競争社会に(略)帰ってきたと気づいたとき、石原の価値観は新たに組み立て直さなければならなかったはずである

告発しない、という姿勢を貫いていた石原が、徐々にエッセイでラーゲリのことなど書いたのを読んで、何かほっとした気がしたが今回もいろいろな切り口で教えられた。

**石毛拓郎「雑感「魯迅」(連載・第22回)**  
**……狂人日記を読む「人食った」のないうちを救え！(1)」「潮流詩派」277号)**

毎回楽しみに読んでいる連載である。

実は私は「狂人日記」をまだ読んでいない。是非読まなければと思っている。「日記」には(人食を食べることを習慣としているらしい集

落の話)が食後の他愛ない「世間話」のように語られ、進んでいくという。何故魯迅は「狂人日記」を書いたのか？

……創作動機を推察してみれば、(孝子賢婦が、自分の肉を食べさせ、病気を治す)といった儒教的説話、説教の「美談」を乱世に問うてみると、逆に、「弱肉強食」の臭いがしてくるのではないかと、といった魯迅の苦渋さをも、忖度できるのです。(略)「人食い話」を、中国内部の動乱期に提供し(略)人々の暮らしの中に浸み込んでいる(現状維持という奴隷根性)を払拭して欲しい……。

それを書きながら、わが国でもアイヌ民族への同化政策、東北では蝦夷の歴史を誇る福島原発被災者、沖縄の基地建設、大浦湾の「辺野古」とありながら、当事者ではないから声をあげない、ということを考える。ウクライナやパレスチナの惨状に対するわが国の対応も個人に跳ね返ってくるという。ここにもも文学で戦っている人がいる。

**高橋富美子「峯澤典子の詩の方法」(「木想」14号)**

最後になってしまったが、非常に峯澤典子の詩の特徴をとらえたいい書評だったので付け加えておきたいと思う。

【受贈詩誌】

「秋田県現代詩年鑑二〇二四」・「ア・テン  
ボ」65号・「アリゼ」219・220号・「石ノ森」200  
記念号・「交野ヶ原」96号・「GAGA」89号・  
「KAIGA」125号・「CROSSROAD」23号・「木  
立ち」14号・「詩杜」9号・「軸」151号・「多  
島海」45号・「月の村志番地」15号・「潮流詩  
派」277号・「Nemesis」9号・「飛脚」44・45  
号・「笛」305号・「ぼとり」73号・「三重詩人」  
265号・「木想」14号・「りんごの木」66号・  
「RIVERE」193・194号・「歷程」617号・「Rosa  
とKamel」8号